

# ブラジル都市貧困地域における

## コミュニティ教育

田村 梨花

### はじめに

開発途上国において、教育問題は常に解決すべき最優先事項としてとらえられている。ブラジルもその例外ではない。戦後の開発政策により、識字教育と公教育の普及を中心とした教育開発が実践され、現在では他の途上国と比較し、識字率、就学率は高い数値を示すに至っている\*1。また、1990年には「児童青少年法」が制定され、就学年齢の子どもに対し教育を基本的権利として保証する社会環境が形成された。

しかしながら、ブラジルはいまだ深刻な教育問題を抱えている。貧困層の子どもの留年、退学の多さに起因する、初等教育修了率の低さがその一つである\*2。従来、貧困層の子どもの初等教育参加率の低さの原因は家庭の経済的貧困にあるとされ、その対応施策の一つとして奨学金制度が市政府レベルで導入されている。しかし、子どもを学校に通わせるそのような試みにもかかわらず、現実には、都市貧困地域や農村地域において「学校の外にいる子ども」が数多く存在している。それで

は、学校に通っていない子どもたちは組織的な教育はまったく受けていないのだろうか。

ブラジルでは、貧困層の子どもを対象に社会教育、文化教育を実践するコミュニティ教育が、1980年代から都市部で発展してきた。公的資格を有しないノンフォーマル教育の\*3形態であるコミュニティ教育は、地域住民の協力によって生まれた教育活動である。本稿は、北部B市における都市貧困地域のコミュニティ教育活動を事例に、コミュニティ教育の実践内容を参与観察的手法により分析し、その教育活動の社会的役割を明らかにすることを目的としている。これまで、公教育システムの分析が中心とされてきた途上国の教育研究では明確にその意義が認識されることのなかったノンフォーマル教育の社会的役割の分析は、今後のブラジルの教育開発、社会開発の動向を検討する上で重要な資料の一つとなると思われる\*4。

本稿ではまず、コミュニティ教育の発生する社会的背景を考察するため、ファヴェーラと呼ばれる都市貧困地域在住の子どもの生活と社会状況を概観した後、そのような子どものために作られたファヴェーラのコミュニティ学校の一般的特徴を

記述する。次に、調査対象であるNGO、PCBの組織形成過程、現在の活動を記述する。その上で、参与観察で得られた資料をもとに、教育内容、教育方法、家庭や政策との関連について分析する\*5。最後に、調査分析をもとに、コミュニティ教育の社会的役割について考察する。

- \* 1 1991年の統計で、成人識字率は80%、初等教育純就学率(就学該当年齢で就学する子どもの就学該当年齢人口に対する比率)は86%であった(PNUD/IPEA, *Relatório sobre o desenvolvimento humano no Brasil 1996*, Brasília, PNUD/IPEA, 1996, p.178)。
- \* 2 1993年、10歳以上の平均就学年数は5.4年である(IPEA, “Educação e capacitação científica e tecnológica: crise e desafios,” em IPEA, *O Brasil na Virada do Milênio*, Brasília, IPEA, 1997, p.98)。また94年の統計では、第1学年のうち、25%が留年生で、70%が7歳以上である(Barros, Ricardo, Rosane Mendonça and Sonia Rocha, *Welfare, Inequality, Poverty, Social Indicators and Social Programs in Brazil in the 1980s*, Update Version with Ann Mitchell's Revisions, Brasília, IPEA, 1993, p.22)。
- \* 3 ノンフォーマル教育とは、フォーマルではないが組織化された教育活動をさす。同様にフォーマルではないが、非組織的な教育活動であるインフォーマル教育とは区別した(鈴木敏政『学校型教育を超えて』北樹出版 1997年) 38ページ。
- \* 4 NGOによるコミュニティベースの教育研究は、すでに多数報告されている(O' Gorman, Frances, “Brazilian Community Development: Changes and Challenges,” in Gary Craig and Marjorie Mayo eds., *Community Empowerment: A Reader in Participation and Development*, London and New Jersey, ZED Books, 1995, pp.206-217; Graciani, Maria Stela Santos, “Brazil: Children of the Streets,” in Cyril Poster and Jurgen Zimmer eds., *Community Education in the Third World*, London and New York, Routledge, 1992, pp.43-51など)。本稿はその質

的分析を試みた事例研究である。

- \* 5 調査対象であるNGO、PCBの組織に関する名称、登場する個人はすべて仮名である。

## 1 ファヴェーラのコミュニティ教育

### 1. ファヴェーラの子どもの生活

戦後の急速な都市化に伴い、ブラジルの各都市周辺部にはファヴェーラと呼ばれる不法占拠居住地区が増加した。住民のほとんどはインフォーマルで収入の不安定な職業に就いている。女性も家政婦として働き、一家の収入を支えている。仕事の場所は都市中心部にあるので、バスなどの公共交通手段を使い、毎日長時間を費やし通勤している。また、「無法地帯」であるファヴェーラは、麻薬組織の巣窟になっていることも多く、暴力的な事件や薬物絡みの犯罪が頻発している地域でもある。

そのような社会状況において子どもの生活が非常に厳しいことは、想像に難くない。両親が共働きをしても、家庭を養うに十分な収入を得ることのできない状況では、子どもも労働力の一部とみなされ、幼い頃から親の手伝いや他の労働に従事することになる。ブラジルの公教育は一般的に1日3部制であるため、学校に通っている子どもも、それ以外の時間帯に働いている場合が多い\*6。また、両親とも早朝から深夜まで働かなければならない状況では、年上の子どもが幼い子どもの面倒をみるために一日中家庭に拘束されることになる。このように、家庭の経済的理由から、貧困家庭の子どもが最終的に通学を断念してしまうことは従来の調査研究により詳細に報告されている\*7。また、両親の離婚や、再婚による家族構成の複雑化は、子どもへの性的虐待、家庭内暴力を引き起こす。こうした暴力や、労働を強いられたりする抑圧的な生活から脱出するために、みずから家庭を

飛び出してストリートチルドレンとなる子どもがブラジルには数多い。

また、ファヴェーラという治安の悪い地域では、麻薬組織が子どもを薬物運搬のための使い走りとして利用することがある。また、子どもが組織の犯罪に巻き込まれる可能性が高い。子どもが麻薬を使うようになることも、住民のあいだで心配されている問題の一つである。近所の顔見知りの子どもの路上に出て何週間も帰宅しなかったり、犯罪に巻き込まれたという話を聞くことは、住民にとって悲しい知らせであり、いつそれが自分の子どもや、親戚の子どもに関わってくるかわからない問題でもある。ファヴェーラのコミュニティ教育は、そうした社会状況を変えようとする意識が住民のあいだに生まれることによって形成される教育活動である。

## 2. ファヴェーラのコミュニティ学校

子どもが路上に出てしまうことを防ぎたい、子どもの生活を改善したいという住民共通の意識の高まりは、主に教会でのコミュニティ活動を軸にさまざまな教育活動へと展開を遂げる\*8。それらの教育活動は、就学年齢に達しない子どもの託児所、保育所から、就学年齢層の子どもを対象にした教育活動へと多岐にわたる。その母体の設立時期は、ファヴェーラに公立の学校ができる以前の1970年代後半～80年代の軍事政権下に遡る。その時期に生まれていたコミュニティベースの活動が引き継がれ、生活場面で新たに発生する社会問題を解決するために、現在もコミュニティ教育が行なわれている。コミュニティ教育は、子どもが公立学校に通わない時間を利用して実践される教育活動である。

コミュニティ教育の重要な役割の一つに、昼食、軽食の支給がある。ブラジルの公立学校は、近年

軽食を支給している学校は増えているが、給食制度を導入しているものは少ない。通常、昼食は自宅ですることになるが、ファヴェーラの子どもの場合、親がその時間帯に在宅していることはほとんどなく、朝食をとってくる子どもすら少ないのが現実である。そのような子どもに無料または廉価で昼食、軽食を与えることができるように、住民が協力し合い、物資を集め、ときには教会の支援のもと、食堂としての場所を構築すべく発展したコミュニティ学校は多い。

コミュニティ学校では、昼食を目的に集まってきた子どもに、ダンス、芸術活動といった情操教育、簡単な職業訓練の機会を提供し、子どもが楽しめるような場を形成することで、子どもの自主的な参加意識を誘発している。初めはボランティアによって運営されていたが、対象となる子どもが増加するにつれ、長期間働いていたボランティアを有給スタッフにしている。活動資金は、教会を通じた援助や、組織自らキャンペーンを計画立案し地域住民に資金協力を募る、自助努力的な方法により集めている。市政府や国際組織から資金援助を受けることもあるが、一カ所に依存することは少なく、内容別に各方面から異なる援助を受けるケースが多い。

コミュニティ教育への参加費用は基本的に無料である。貧困家庭の子どもを対象にしていることがその主たる理由である。しかし、どの団体もその地区のファヴェーラ在住の子どもをすべて受け入れるだけの予算はないので、いったん登録した子どもの欠席が続くと、家庭訪問をして参加の意志を確認し、継続して参加できない場合には他の子を登録することもある。

コミュニティ教育の一般的特徴の一つに、公立学校への就学を義務づけていることがある。このことは、コミュニティの教育活動では公立学校で

行なわれる基礎的学習を保証できないことや、後の社会生活における義務教育修了の重要性の認識に基づくものである。したがって、コミュニティ教育に参加する子どもは、公教育とコミュニティ教育という二通りの教育の場を日々体験しているのである。

従来、ブラジルの教育開発において、コミュニティベースの教育は公教育の補完的役割として認識されることが多かった\*9。しかし、ファヴェーラの子どもを引き付ける要素を持ち、彼らの置かれている社会状況に促した教育活動を実践しているコミュニティ教育は、子どもに公教育とは異なる次元における人間関係形成の場を提供しているという点からも、よりダイナミックな社会的効果を持つ教育活動であると考えられる。その質的な把握を目的とし、ブラジル北部に実在するNGO、PCBにおいてフィールド調査を実施した\*10。

\* 6 ブラジルの児童労働に関する近年の報告は Rizzini, Irene, Irma Rizzini and Fernanda Rosa Borges, "Brazil: Children's Strength Is Not in Their Work," in Maria Cristina Salazar ed., *Child Work and Education-Five Case Studies from Latin America*, Aldershot, Ashgate, 1998, pp. 20-38を参照。

\* 7 IPEA, *Economia brasileira em perspectiva*, Rio de Janeiro, IPEA, 1996; 海外経済協力基金『ブラジル貧困州開発における諸課題』開発援助研究所 1996年など。

\* 8 以下の記述は、報告者による1998年3～8月のサンパウロおよびリオデジャネイロにおける訪問調査, Landim, Leirah and Lecticia Ligneul Cotrim, *ONGs: Um perfil*, São Paulo, ABONG/ISER, 1996; Garcia, Margarita Bosch, "O Protagonismo das ONGs," em *CEMPEC, ONGs sua função social I*, São Paulo, Cromosete, 1997, pp. 38-46を参考にした。

\* 9 PNUD/IPEA, *op. cit.*, pp. 109-113.

\* 10 本調査は、1998年5～6月の2カ月間実施さ

れた。

## 2 コミュニティ教育の形成過程

### —調査対象の概要—

調査対象となったPCBは、ブラジル北部パラ州北東部アマゾン川河口に面するB市市街中心部に活動拠点をもつNGOである\*11。PCBは、軍事政権下、高度経済成長への道をブラジルが歩んでいた時期に出現した民衆組織の一つである。活動を始めたのは、イタリアから派遣されたS神父である。1960年代末、B市の貧困地区の職業訓練校に派遣された神父は、日曜学校に集まってくる青少年にグループを作らせ、彼らを取り巻く社会問題について話し合わせた。彼は、自分が先頭に立ち問題を指摘するのではなく、子ども自身に問題を発見させ、解決方法を考えさせることで、社会を変えていこうと試みたのである。

日曜学校に来る子どもは、街の探索をつうじ自分の暮らしの問題を発見する活動のなかで、市場で物を運んだり袋を売ったりして働く小さな子どものために、食堂を作ることを考案した。次第にその活動は、日曜学校からは独立した形で、子ども、若者を中心とした社会運動の一つとして発展することとなった。

食堂運営資金の調達には、公的機関や国際援助団体に依存しない、自立的な方法を検討した。まず、そこで役立つような不要品を集めるキャンペーンを始めることを考えた。それは、市の住民にPCBの存在を知ってもらうための試みでもあった。街中にチラシを配って行なわれた、連帯と分配をテーマにしたキャンペーンは、数多くの不用品を集めることに成功しただけではなく、彼らの活動に対するさまざまな社会階層の人々の関心を引き起こした。集められた不要品は、修理を施されて

から、貧困層の人々に低価格で分けられ、その収入は主要な活動資金となった。

PCBの活動は、ブラジル内外のさまざまな社会運動団体とつながりを深め、次第に国際機関、海外NGOの援助を受け入れるようになるが、慈善ではなく連帯を重要視した協定に基づく関係を構築している。地域社会からのサポートを第一に考え、年に一度の不要品回収キャンペーンを活動の軸とした、コミュニティレベルの運営を目指している\*12。

2000年に30周年を迎えるPCBの代表的な活動は、(1)アーツ・オブ・ライフ(市場で働いていた経験を持つ少女を対象にした活動)、(2)POA(自営業開始のための仕事を覚えるプロジェクト。裁縫や木工以外にも、家電の修理や溶接の授業が行なわれる職業訓練所)、(3)Eシテイ(住民とPCBのボランティアが協力して建てた学校。市政府と提携し、公的資格を持つ)、(4)路上教育(路上教育者による、売春する少女の路上パトロール。少女と会話をするのが仕事)などがある\*13。

\*11 以下、PCBの形成に関してはスタッフへの聞き取り調査と、Shift, Anthony, *Children for Social Change: Education for Citizenship of Street and Working Children in Brazil*, Nottingham, Educational Heretics Press, 1997, pp. 1-38を参考にした。

\*12 1998年度の収入の内訳は、個人寄付18.03%、団体寄付52.8%、公的助成金15.99%、活動による収入10.54%、その他2.64%であった。

\*13 (1)(2)は市街中心部に位置し、(3)は市街中心部から20キロほど離れた場所にある。また、(4)は市の中心部に位置するR広場で行なわれる。

### 3 コミュニティ教育の実践から

#### 1. 教育内容——生活の問題を話し合う

PCBで行なわれている活動は、机に座って鉛筆を持って文字を学ぶような形態を持たない。識字教育や算数、歴史といった、公教育で実践される

基礎学習能力の育成を目的とした授業はほとんどない。アーツ・オブ・ライフでは情操教育、POAでは職業訓練が主な活動である。そして、最も重要な役割は、創立時から変わらぬ食堂での昼食である。子どもは昼食をとってから公立学校に行き、学校から帰ってきた子どもはここで昼食をとってから活動に入るのである。

PCBで行なわれるもので最も重要な位置を占める教育活動は、子どもの日常生活に深く関係する問題群をテーマにした社会教育である。また、PCBの授業では、その開始にあたり、必ずアチヴィダーデ(atividade)と呼ばれる遊びが行なわれる。アチヴィダーデは開発教育の実践でアイスブレイキングと呼ばれるものと同じ性格を持つ活動の一種で、参加メンバーの緊張をほぐして仲間同志の親交を深める機能と、授業で扱われるテーマに関する問題意識の共有化を図る機能を同時に果たすものである\*14。以下の事例は、PCBの学園祭ともいえる不要品回収キャンペーンの1998年度のテーマ「社会的排除」(Exclusão Social)を考えるための合宿で行なわれたアチヴィダーデである。

事例1：合宿所につき、荷物を各部屋においてから、まずアチヴィダーデが始められることになった。スタッフはまず、うす黄色の紙を、ちょうどおでこにフィットするくらいの大さの長方形に切ってゆく。その紙に、隣のスタッフが「先生」「白人」「ビジネスマン」「金持ち」「政治家」さらに「黒人」「失業者」「売春婦」「同性愛者」など、さまざまな言葉を書く。それを、本人には見えないように、子どものおでこにセロテープで貼りつけていく。友だちのおでこに貼られた「売春婦」や「同性愛者」の言葉を見て、あちこちで笑いが巻き起こっている。「絶対自分のは見ないこと。見ちゃ



「土地なし農民」



「ブラジルの富の格差」

事例1の合宿では、演劇や人形劇、ポスター作成やルポ番組作りといったさまざまな方法を使って「社会的排除」を表現するという活動が行なわれた。子どもはみずから入りたいグループに分かれ、黒人差別や失業の問題を題材にして発表の準備をし、最後に、盛大な発表会が開かれた。写真は、その際のポスターの一部である。

(1999年筆者撮影)

ったら、面白くないわよ」というスタッフの教えどおり、自分の言葉を見ることはない。言葉はどんどんおでこに貼られてゆく。あちこちから笑い声や吹き出す声が聞こえてくる。

「みんなのおでこに、いろんなことばが貼ってあるわよね。それを見て、相手にどういふ感情を抱くか体で示しながら、グループに分かれること！ことばを教えちゃ駄目よ」「えっ？でも、自分のことばがわかんないんじゃない、グループにわかれることなんて出来ないよ」「よく考えて。一つだけ方法があるのよ。自分の前にいる二人の言葉を見て、二人の仲がいいはずだと思ったら、彼らを一緒にしてあげるの。そうすると、その二人は互いの言葉を見て、自分がどんな存在なのか何となく分かるでしょ？はい、さっさとやる」

これは、例えば「金持ち」と「政治家」を連れて来て、「あなたたちは一緒にいていい」と教えてあげ

ると、「金持ち」と「政治家」の二人はお互いのおでこのことばを見て、初めて自分はこういう層にいるのかと実感する、というゲームである。このゲームの目的は、「売春婦」「失業者」「土地なし農民」と書かれた子どもがゲーム中どう感じたかという点にある。「賢い」という子はおでこにこして「教師」の子と一緒にいた。「黒人」の子は、「誰も向いてくれなかった。完全に無視された」という。「日雇労働者」の子も、「誰も来てくれないので、どうすればいいのかわからなかった」という。「売春婦」と書かれた女の子は、ゲームが終わってから自分の紙を見て、しばらくは参ったなあという顔をして笑っていたが、次第にまじめな顔つきになり、立ち上がって演説を始めた。

事例2：「みんな私を見て大笑いした。指差して大声で笑うだけで、何にも助けてくれなかった。ゲームが終わって『ブッタ』\*15という文字を見て納得したわ。でも、よく考えるとおかしいじゃない。彼女は生活が苦しいから売

春をしてるのよ。食べるためなのよ。それをどうしてあんな風に笑うことが出来るのかって、考えちゃったわ。誰だって『プッタ』ってみたら笑うけど、プッタをしてる人やプッタを職業にしている人を笑うのは、間違ってると思います」

このアチヴィダーデでは、自分に貼られたラベルによって社会的に不当に扱われる「社会的排除」とは、人と人との感情から生まれるということを示唆するものである。このように自分を取り巻く社会問題を、自らの問題として体感しながら考える方法が取られている。

ファヴェーラのコミュニティ教育で実践されるテーマは、重いものになりかねない。しかし、ゲームのような方法を取ることで、テーマは子どもの前に突然出される課題ではなく、その問題を考えるきっかけとなりうる。しかも、アチヴィダーデによって、自然とそのテーマに関する意識が高まっていることが予想される。あくまで楽しい形を取って教育が行なわれていることは、PCBの特徴の一つであろう。

子どもを対象にした社会教育は、そのテーマが社会的差別や貧困問題に密着しているほど、社会運動的な色合いを増すが、PCBでは、その内容はあくまでテーマとして用いられるだけであり、それによって社会的革命意識を養うものではない。子どもが社会問題をどう捉え、どう社会を変えていくのかという判断は、すべて子どもに任されているのである。

PCBでは社会の変容をめざす教育よりも、生活の変容をめざした教育の方が多くみられる。差別や貧困の原因などをテーマにした授業よりも、ドラッグ、セックス、エイズといった、青少年が最も関心を抱く問題群で、ファヴェーラの日常生活

に密着しているテーマに関する教育活動が多い。性教育やドラッグに関する授業は、ビデオ教材などを利用し、楽しくしかも心に残るような方法で実践されている。このように、PCBで行なわれる教育活動は、子どもを取り巻く社会問題に対する子ども自身の意識向上を促す役割をもっている。

## 2. 教育方法——子どもの自由意志を尊重する

次に、PCBで実践されている教育方法について分析する。PCBは、子どもの主体的参加を重要視しているため、どの教育活動においても参加する子どもの自由意志が尊重されるような教育方法が取られている。以下は、アーツ・オブ・ライフのメンバーが、6月祭で発表するためにカリンボ(地域特有のフォークダンス)の練習をしている場面である。

**事例3**：カリンボ自体は、その腰つきを見ても別段改めて練習する必要はなさそうだが、列を作って交互に入れ替わったり、向きを揃えたりといったテクニックが必要とされるため、隣の公立学校でダンス部に入っている18歳ほどの年齢の男の子を2人呼んできて集中講義が始まった。しかし、メンバー全員が来ているわけではない。

「ここ誰かいたっけ」「マリア」「今日は休み?」「来てない」「そう、じゃあ、君入って、代わりに踊って」と、座ってダンスを眺めていたルシアに声がかかった。「(面倒くさそうに)ええ?」「見てたから、大体わかるでしょ」

ルシアは大抵遅れてくるから、ダンスの内容は分かっているようだが。それでも怪訝そうな顔をして(彼女はいつもそういう顔をしているのだが)しぶしぶ列に入っていく。表情はそのままに手足を動かす。しかし、しばらくた

つと列から抜けていく。「おいおい、どうしたの？」とボランティアの男の子がきつい調子ではなく尋ねると「やっぱりやめた」という。踊っている女の子たちからは文句は出ない。ダンスはつまらなかったのだろうか、ロシアは外にいったしまった。参加せずに椅子に座っている女の子は他にも4、5人いて、遠巻きにダンスを見ている。私の横に座って書く字に興味深そうに見ているタニアに「どうして踊らないの？」と聞いてみた。

「踊りたくないもん」「でも、お祭りで踊れなくなっちゃうよ」「行かないから別にいい」「来ないの？」「わかんないけど」

ダンスに参加するもしないも子どもの意志によって決定されている。子どもの気が変わって途中から加わるともう一度ははじめからやり直さなければならないので、授業の進行は困難をきわめるようにみえる。しかし、スタッフが参加を強制するようなことはない。子どもが自主的に参加することは内発的動機づけと呼ばれる心理的効果を促す。自分の意志により教育活動へ継続的に参加することは、最終的に、例えばダンスの発表会での成功を友達同士で喜び合えるように、活動の成果を自分自身で実感する効果をもたらす。それは、さらなる活動参加への意志を引き出すこととなる。

次に、PCBにおける子どもとスタッフとの関係性を考察する。PCBでは、教師役であるスタッフが先生と呼ばれることはなく、たいていファーストネームかニックネームで呼ばれている。運営スタッフはPCBの活動の参加経歴が長い人々であり、職業訓練や美術、音楽の授業は地域住民でその分野の専門的知識を持つ人々がボランティアで受け持っている。以下は、PCBのプロジェクトの一つである職業訓練教室の運営スタッフと子どもとの

会話である。

**事例4**：スタッフの一人であるエレナと一緒に帰ってくれるというので、彼女の仕事が終わるまで待っていた時のことである。仕事の後片づけをすませ、帰宅する準備を終えつつあるエレナに、事務所の入り口で座り込んで笑いながら「怒ってる、怒ってる」と言い続ける少年がいた。

「怒ってなんかないわよ」「怒ってる」「怒ってないってば。ただね、どうしてまた（彼がプロジェクトに）来なくなってしまったのか、それが残念なだけよ」「でも怒ってるでしょ」「怒ってない。悲しいのよ。だって、一度あなたが来れなくなってから、二人で家の人も交えて話し合った時、あなたがもう一度来たいって言ったから、他に登録したい人がいたけれど、あなたのための空きを取っておいたのよ。それなのに、一回も来やしなかったじゃない。毎日待ってたのよ。ルイス（授業を受け持つ担任）だって『もうあの子は来ないんじゃないか？ だったら他の子を入れよう』って言ったのよ。だけど私は『彼は絶対来ますから』って言って、待ってたのよ。それがいつまでたっても現れない」「だから怒ってるでしょ」「怒ってないわよ。残念なだけって言うてでしょう。なんで笑ってるの？ おかしいことじゃないわよ。でも、今日ここに現れたってことは、明日からは来るってことなのね」「わからない……」「どうして」「わからないから」「来たくないの？」「わからない」「家に問題があるの？」「別にそういうことじゃないけど」「あなたが来たいのなら、来ればいいわ。来ないのなら、他の子を入れなきゃいけないのよ。良く考えて」「ほら、怒ってる」「本当に怒ってなんかないってば」



PCBのスタッフは、子どもとの会話を重視し、それに十分な時間を費やしている。事例4でスタッフは、子どもがプロジェクトに来る意志があるのかどうかを尋ねているが、子どもは彼女の「怒っている」ように見える態度に文句を言い続け、話は前に進まない。この押し問答は、子どもがその場から立ち去るまで約30分くらい続けられていた。PCBでは、子どもが本当に納得するまで、粘り強く会話を続けている。子どもがいつでも自分の意見を述べることができる場で、スタッフもまた自分自身の意見を子どもに主張している。このように、子どもとスタッフのあいだには対等な関係性が構築されている。

### 3. 教育活動の社会的影響——家庭と政府による政策

最後に、コミュニティ教育の社会的影響を、家庭および政府による政策との関連から分析する。ファヴェーラのコミュニティ教育の重要な役割の一つは、子どもを活動に参加させることで家族を巻き込み、地域住民の生活を改善することにある。PCBの場合は、子どもの親と定期的にミーティングを開いて、子どもから親への活動波及効果を目指している。ミーティングは、家庭とPCBのコミュニケーションの場として機能している。

また、地域的なネットワークをもつNGOは、政府による政策の補助活動を行なうことが多い。PCBは、B市政府のプログラムであるボルサ・エスコラ(Bolsa Escola)\*<sup>16</sup>を受ける家庭の選定に関する統計作成に関わっている。調査のためにスタッフが直接子どもの家庭を訪問すると、統計では現れることのない、家庭の質的な問題に直面することがある。

路上教育で出会った少女の中に、レイラという子がいた。彼女は昔、毎日のように夕方から朝まで売春をしていたが、おばあさんから教わった造

花作りが得意だというので、エデュカドーラ(指導員)がPCBに来て授業をしてはどうかと提案したところ、一度PCBに顔を出したことがあった。だが、必要な材料の打ち合わせをしたにもかかわらず、彼女はPCBに来なくなってしまった。できればレイラに授業をやって欲しいと思っていたエデュカドーラたちは、折りをみて彼女の家に行こうと話していた。そんな矢先、レイラがまた売春をしに広場に現われ、2人の男性から暴力をふるわれるという事件が起きた。その話をエデュカドーラにしてくれた売春仲間の女の子が、レイラの体の具合がひどく悪そうだったと言ったので、早速翌日、みんなで彼女の家に行くことになった。レイラの兄がボルサ・エスコラを受けているので、家庭は毎月、最低賃金分の現金を受け取っている。それなのに、娘が売春を続ける原因を探る必要があった。

家庭訪問をしてわかったのは、レイラの家はボルサ・エスコラのお金を家具や電化製品の購入に使っていたことであった。月最低賃金分のわずかなお金でも、ローンを組めば購入可能である。奨学金を子どもの学業に使わない家庭は増加しているといわれるが、奨学金を支給する立場のB市政府の職員が、家庭訪問をすることは無いという。社会福祉局はその子どもの就学状況と成績で支給の査定を行なうので、子どもが学校に通ってさえいれば、お金が直接子どもの教育資金にならなくても奨学金は支給される。しかしPCBでは、奨学金支給を受ける家族が子どもの教育への意識を高め、奨学金が子どものために有効利用されるように、毎月ミーティングを開催し、家族全員が参加できるようなワークショップを開いている。

PCBの活動は、直接的には親の行動を改めるような効果を持たないとしても、ともすれば家族の中で孤立し、路上に出てしまう子どもと家庭との

間を媒介する役割を果たしている。さらに、親の態度を責めるのではなく、家庭訪問やミーティングにより、家族と話し合うことで悩みを解決する方法で、子どもの家庭内での状態を改善しようと努力している。家族との顔のみえる交渉を続けることは、政府の政策を円滑に、効率よく実施するために不可欠な役割だと考えられる。

しかし、家庭訪問を繰り返しても、事態は何も変わらないこともある。PCBの活動は、家庭に対し経済的影響を及ぼさない。活動によって得られる収入は、活動維持費になるだけで個人には還元されないし、POA(PCB内の職業訓練)の修了生で自分の店を開業する者は数えるほどである。このようにPCBの活動は、コミュニティの構成員が経済的自立を果たせるような具体的な活動ではない。しかし、子どもはPCBという場で、自分の好きなことを、仲間と一緒にやってみることで、満足感を得ている。

PCBの子どもからは、幾度となく彼らの誇りを感じることができた。POAの裁縫教室では、女の子はいつも、自分の作った服を何度も出してきて見せてくれる。POAの修了生は修了証書を受け取り、親はそれを誇りに思う。証書を集めるためにいくつものプロジェクトに参加する子どももいる。彼らはその証書を、いい仕事に就くために手に入れるのではない。証書自体は就職に直接効果がないこともわかっている。しかし、その証書は、子どもの誇りを表現している。それは、子ども自身がPCBの活動を通して培ったものである。コミュニティ教育の活動に参加することで、子どもの心に自信と自尊心が生まれるその手助けこそが、PCBの教育活動が子どもに与える社会的影響であり、コミュニティ教育の存在意義であろう。

\*14 開発教育協議会「アイス・ブレイキング」(開発教育協議会編『開発教育ニュースレター』開

発教育協議会 1997年)2~4ページ。

\*15 プッタ(puta)は「プロステティテュータ」(売春婦)の略であり、英語の「ビッチ」(bitch)と同様に「ばか」とか「くそったれ」という意味で使われることがある。

\*16 ボルサ・エスコラとは、市行政レベルで実施されている給付型奨学金制度である。就学児童のいる世帯に月最低賃金分の資金援助をするもので、地域によっては別名称である。

## おわりに

以上の分析から、コミュニティ教育の社会的役割を考察する。まず、コミュニティ教育では、子どもの生活と関わりのある問題を考える社会教育が行なわれている。これは、コミュニティ開発の要素をもつ教育活動であり、子どもの生活変容を目的とし、ブラジルの社会問題を考える契機を与えている。さらに教育実践においては、子ども自身の自由意志による主体的な活動参加が重要視され、子どもとスタッフが対等な関係にあり、子どもの意見が尊重されている。こうした方法は、子どもが心理的、社会的な力を獲得できるプロセスとなり、エンパワーメントとしての効果をもたらす。子どものエンパワーメント(社会的、自立的な能力の形成をもたらすこと)を重視した教育方法を実践しているからこそ、コミュニティ開発につながる社会教育の授業は効果を上げていると考えられる。

また、家庭や政府による政策に関連した活動のなかで、子どもが家庭で抱えている質的な問題を発見している事例の分析から、コミュニティ教育活動が家庭と行政の媒体的役割を担っていることがわかった。家族との話し合いによる問題解決への試みは、行政側の社会開発の推進にNGOが重要な役割を果たしている一例である。

ファヴェーラのコミュニティ教育は、地域社会の抱える問題を住民が解決しようとする、有効な社会開発の一例として認識できる。地域の子どもの生活に必要とされる教育は、公立学校で与えられる知育中心の教育とは異なる次元で存在する、生きるための教育である。それは、公的資格を持たないが故に将来的に経済的効果をもたらさないとしても、子どもの生活改善と心の育成、価値観形成に深く影響する。「対話と意識化」を説いた教育学者パウロ・フレイレの思想を受け継いだ民衆教育の歴史のあるブラジルで生まれ育った、子どもの主体性を重要視する都市貧困地域のコミュニティ教育は、従来の公教育中心の教育開発に新たな方向性を与える可能性を持つと考えられる。

近年、ブラジルのコミュニティ教育活動は、さまざまな文化活動を積極的に取り入れ、さらにその多様性を増している\*17。コミュニティ教育は、子ども、家庭、社会福祉の業務に携わる公務員、ボランティアに訪れる大学生といったさまざまな社

会の構成員を通じて、都市住民が教育問題を地域レベルで解決していこうとする原動力となりうる民衆運動ではないだろうか。コミュニティ教育の社会的役割をより明確に理解するには、フィールド調査をさらに長期的に行なうことが必要であろう。

\*17 地域発祥の音楽の練習を文化活動の中心として取り入れたNGO(Almeida, Fernanda Goncalves and Inaiá Maria Moreira de Carvalho, "Projeto Axé: Educating Excluded Children in Salvador," in Roslyn Arlin Mickelson ed, *Children on the Streets of the Americas ? Globalization, Homelessness and Education in the United States, Brazil and Cuba*, London, Routledge, 2000, pp.172-183) , ファヴェーラのコミュニティ学校に中古パソコンを寄付し、市民権を学ぶ教育のために地域住民が情報技術を利用できるように活動しているNGO(Comité para Democratização da Informática, ホームページはwww.cdi.org.br)などがある。

(たむら・りか/上智大学大学院)